

第2日目(8月27日) 午前 第1室(102講義室) (1) 10:00 (2) 10:40

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	高校	スピーキング	生田裕二(千葉県立千葉南高等学校)	英検2級合格者のスピーキング力の現状と問題点—準1級合格者とのギャップを参考に—	英検2級合格は、多くの英語学習者にとって習得過程における到達目標の1つである。日本英語検定協会はそのレベルを「高校卒業程度」、「社会生活に必要な英語を理解し、また使用できる能力」と位置づけている。では2級合格者の英語力は実際そこまで高いものなのだろうか。発表者は定期的に準1級と2級の2次試験面接官を務め、また英検受験生のスピーキング指導も行ってきたが、2級合格者に関して言えば上記のスピーキング力には必ずしも到達していない場合が散見される。さらに準1級合格者との間に存在する大きな英語力の差も感じてきた。本研究では、2級合格者のスピーキング力の現状に焦点をあて、彼らがどこでつまづいているかを内容的・文法的に検証した。また2級合格までは到達できても準1級合格には至らない学習者が多い実情を踏まえ、準1級合格者のスピーキングを検証し、この2つの級の合格者間にある英語力の違いも考察した。
(2)	研究発表	大学	語彙	大橋由紀子(ヤマザキ学園大学)・岡 勝巖(ヤマザキ学園大学)・片桐徳昭(北海道教育大学)	ESPにおける医療カルテコーパスデザインの提案と研究モデル—動物医療カルテコーパス構築を例に—	本研究は動物医療・看護カルテのコーパスから得られた高頻出語彙の傾向を分析・考察することを目的とする。コーパスは、アメリカに所在する動物病院から入手した2014年から2016年前半までの医療・看護カルテに対し、文書構造や動物の種類等でカテゴリ分けしたタグセットを付加することで構築した。タグセットの付加には正規表現を用い半自動的に行った。その後、perl scriptで指定タグごとに抽出し、項目毎の高頻出単語リストを作成した。今回は比較的件数の多かった皮膚炎・眼疾患・嘔吐・歩行困難・ワクチンに関する項目に焦点を当てた。更に各項目での高頻出語をBrown Corpusと対比して計算した対数尤度比(G2)をもとに動物医療・看護カルテで頻出する特徴的な語を抽出した。語彙リストには、normal (G2=21176)のような各カルテに複数回使用されている特別な語を除いても、対数尤度比2000以上の語が多く出現した。

第2日目(8月27日) 午前 第2室(103講義室) (1) 10:00 (2) 10:40

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	中学	テストイング	折橋晃美(長野県小諸市教育委員会/長野県小諸市立東小学校)	「評価」でつなぐ小中連携—子どもも教師も成長する評価とは—	子どもの姿をよく知る小学校のHRTと子どもの英語の学びをよく知る中学校のJTEが連携して、評価の観点や方法を明らかにし、子どもにつけるべき力をきめ出すことによって、授業の内容が精選され、子どもの授業に向かう姿も変わった。授業内で子どもと教師の目標が重なることは、子どもの学びを豊かにし、さらには次へのステップの展望をもつことにつながった。 Can-do-listやCan-Doチェックシートをもとに、単元や各授業の評価の観点をきめ出し、教師と子ども双方の授業の振り返りから観点の有効性を検証した。その結果、評価の観点が明確になり、教師と子どもの目標が重なった授業では、次々に子どもは動機付けされ、自信をもって英語を使用した。本発表は、評価でつないだ小中連携の実践を報告するものである。
(2)	研究発表	高校	文法	鈴木祐一(神奈川大学)・白倉美里(東京学芸大学)	高校生の名詞句境界把握に関するパイロット調査—Koukousei Billy's (KB) Testの開発—	多くの日本の高校生は英語の基礎的な知識の定着が不十分だという調査結果が出てきている(金谷他, 2017)。本研究では、「英語の基礎的な知識」として「(主語位置における)名詞句の境界把握能力」に焦点を当て、高校生の名詞句境界把握能力を調べた結果を報告する。

第2日目(8月27日) 午前 第3室(104講義室) (1) 10:00 (2) 10:40

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	高校	学習者	西山涼太(埼玉県立坂戸高等学校)・鈴木 誠(埼玉県教育局)	外国語科に在籍する高校生英語学習者の英語発音と心的要因	本研究では、外国語科在籍の生徒に焦点をあて、英語学習とりわけ話すことへの意識及び英語音声进行分析・考察し、実態を明らかにしようとするものである。アンケート調査として(1)Foreign Language Classroom Anxiety Scale, (2)Ten Item Personality Inventoryの2つを用い、音声テストとして(1)パッセージ音読、(2)絵描写、(3)意見表明を用い、それぞれをセグメントとプロンディに分けて評価した。上記を統計処理し、英語発音と心的要因の関係性を分析、考察した。

(2)	研究発表	その他	動機	染谷藤重(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)	基本的欲求理論が結果を予測するプロセスの仮説設定－エンゲージメントと自己効力感に着目して－	本研究では、従来から指摘されてきた自己決定理論のミニ理論の一つである基本的欲求理論が結果を予測するプロセスの仮説の設定を行う。本研究では、近年指摘されることが多くなってきた、3欲求の下位概念である満足感(Satisfaction)と不満感(Frustration)に着目し、論を展開する。その過程で、近年行われたきた教育心理学的研究から示唆を得て、満足感・不満感が結果を予測するプロセスの仮説を設定することを目的とする。この媒介変数として、先行研究エンゲージメント、及び自己効力感を設定することになった。今後の課題としては、この仮説を大学生・高校生・中学生、最終的には小学生にも適応し、基本的欲求理論のさらなる発展に寄与できることを期待する。
-----	------	-----	----	---------------------------	---	---

第2日目(8月27日) 午前 第4室(201講義室) (1) 10:00 (2) 10:40

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	高校	教員	シーハン小田早苗(お茶の水女子大学大学院生)	語用論的意識・文法学習・CLTに対する教師の認知と実践	コミュニケーションを水面下で支える語用論の指導を促すためには教師の語用論的意識の改善が必須であるが、現状では多くの教師がコミュニカティブな外国語教育(CLT)の重要性を感じながらも受験のための文法指導とのジレンマに悩んでいる。そこで本研究では、文法指導との統合により語用論的指導を促し、CLT実践につなげるアプローチの可能性を探究するため、日本人教師2名を対象に半構造化面接を実施し、語用論的意識・文法学習・CLTに対する教師の認知と実践について調査した。その結果、調査協力者は共に文法学習とCLT実践双方を重視しており、語用論的要素に対しては自らの学習指導経験においてほとんど意識したことがないものの、文法指導時に丁寧さや緩和表現に言及する等、無意識のうちに統合を実践していると判明した。このことから、教師の語用論的意識改善による、より体系的な統合型指導の可能性が示唆されたと言える。
(2)	研究発表	中学	教員	中山夏恵(文教大学)・栗原文子(中央大学)・久村 研(田園調布学園大学)	言語教師のポートフォリオ(J-POSTL)の有効性一次期学習指導要領に含まれる諸概念の可視化を目指して－	次期指導要領に導入された「主体的、対話的で深い学び」という概念は、『ヨーロッパ言語共通参照枠』(CEFR;ヨーロッパ評議会, 2001)の学習観である自立的(independent), 協同的・インタラクティブ(cooperative and interactive)で、省察的な学び(reflective learning)に通じると考えられる。これらの概念を指導に反映しようとする際、教員にはどのような知識や指導技術が求められるのだろうか。本研究では、この「主体的・対話的・深い学び」を行う際に教員に求められる知識や指導技術を検討する。その際、CEFRを理論的基盤とし、教師の資質能力を可視化するCan-do記述文を収録する『言語教師のポートフォリオ(J-POSTL)』を活用する。更に、それらの項目に対する教員の意識を分析する。得られた結果から、今後の教員研修の計画に際する示唆を探りたい。

第2日目(8月27日) 午前 第5室(202講義室) (1) 10:00 (2) 10:40

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	大学	リーディング	栗原ゆか(東海大学・清水教養教育センター)	英語に不安を抱える大学生への多読指導－リーディング力と英語に対する意識調査－	グレイディッド・リーダーズ(GRs)を使用した多読指導が全国で実施されている。多読研究によると、例えば読解力の向上や英語に対する肯定的な態度等が報告されている。しかし、習熟度の低い大学生を対象にした多読研究はあまり行われていない。従って本研究では、英語に苦手意識を持つ大学1年生が一学期間GRsを多読することにより、彼らのリーディング力と英語に対する意識にどう影響をもたらすかについて調査した。研究参加者は英語リメディアルクラスを受講した15名の大学1年生であった。約13週間にわたり週2回授業で多読を行った。多読前と後にTOEIC Bridge testとアンケート調査を行った。結果、今回の多読活動は学生のリーディング能力を著しく向上させるには至らなかった。しかし学期末アンケートより、参加者が開始前と比べ肯定的な意識を持つ部分があった。多くの学生が「読むことを楽しいと感じる」と答え、また「英語から日本語に訳す癖がなくなった」と答えた。

(2)	研究発表	大学	リーディング	佐藤 選(東京学芸大学大学院生)	日本人英語学習者の基本的な接続表現の習得状況—soの意味認識に焦点を当て—	リーディングやライティングにおいて、接続表現の習得は重要な要因であると考えられるが、日本人英語学習者が英語の接続表現の意味をどのように認識しているか、これまでほとんど明らかにされてきていない。本研究では、特にその認識の個人差が大きいと考えられるsoに焦点をあて、その意味がどのように認識されているかを明らかにするものである。日本人大学生に対し、日本語を文章を用いた接続表現補充テストと、so挿入が可能かの判断テストを実施し、soが日本語の接続表現のどの範囲までをカバーしているかと認識しているかを分析した。その結果、因果を表す接続表現については、soの意味範囲に含まれるという認識は、英語熟達度に関わらず強いことが確認された。一方で、「つまり」に代表される換言を表す接続表現、及び「そして」に代表される、並列を表す接続表現については、その意味認識は英語熟達度及び個人差による影響が強いことが確認された。
-----	------	----	--------	------------------	---------------------------------------	---

第2日目(8月27日) 午前 第6室(203講義室) (1) 10:00 (2) 10:40

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	小学校	早期英語教育	齊田智里(横浜国立大学)	英語免許状所有の有無と小学校英語教科化への意識との関係—小学校英語指導者に求められる資質・能力の探求—	小学校英語教科化に向けて「教員の指導力・技術」が大きな課題となっている。現在小学校英語を指導しているのは、学級担任が9割以上であり、英語専科教員の指導を望む声も大きい(文部科学省、2017)。文部科学省は、英語専科指導も可能な各小学校での中核教員育成のため、平成28年度から「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施」事業を各県の国立大学法人や教育委員会に委託している。小学校英語の指導者に必要な資質・能力を検討するために、まず英語免許状の有無で小学校英語教科化への意識にどのような違いが見られるかを調査した。横浜市や神奈川県内の公立小学校教員で、上記事業に参加し調査に同意した受講者に対して小学校英語教科化に向けた意識調査を実施した。中学英語免許状取得を目指す59名と、すでに免許状を取得し専科指導教員を目指す25名が調査に参加した。免許状所有の有無で小学校英語教科化への意識の違いが見られた。
(2)	研究発表	高校	言語習得	砂田 緑(駒沢女子大学)	関係代名詞を含む文の処理に関する考察	本調査は、英文復唱テストを用いて関係代名詞を含む文の処理の過程に迫ることを目的とした。英文復唱テストはSR(Sentence Repetition)やEI(Elicited Imitation)等の名前では知られているが、文字を読まずに、英文を一文ずつ聞き、ポーズを置いて復唱するというテストである。これは、音真似ではなく学習者の文法知識が測れる方法として注目されており(Sunada, 2014)、時間的制約のもと行われる日本語を母語とする高校生英語学習者120名に、24文から成る英文復唱テストを実施した。調査対象とする英文の種類は以下の6種類である。1. SS: 主格の関係節を主語に持つ文、2. SO: 目的格の関係節を主語に持つ文、3. SOPrep: 前置詞の目的格の関係節を主語に持つ文、4. OS: 主格の関係節を目的語に持つ文、5. OO: 目的格の関係節を目的語に持つ文、6. OOPrep: 前置詞の目的格の関係節を目的語に持つ文。

第2日目(8月27日) 午前 第7室(305講義室) (1) 10:00 (2) 10:40

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(1)	研究発表	高校	指導法	原 希(明治学院大学大学院生)	CLIL型授業がスピーチ作成に与える効果	本研究では、「内容言語統合型学習」の英語指導法としての特徴とその授業効果を明らかにすることを目的とした。まず、CLILに関する先行研究(Coyle, Hood, & Marsh, 2010; Dale & Tanner, 2012; Ikeda, 2013 他)を概観し、日本の教室においてCLILを指導原理とする授業実践を行うことの有効性について論考した。次に、CLILの基本原則である「4つのC」について概観し、CLIL型授業案作成のための枠組みを検討した。その枠組みに基づいて、学習指導案を作成し、大学生19名を対象として実験授業を行い、授業効果の検証を試みた。検証のための測定具として、ヨーロッパ言語共通参照に基づく自己評価アンケートを作成し、実験授業の前後に実施した。また、今回のCLIL型授業のトピック(人種問題)に関して書かれたスピーチ原稿の評価を、量的・質的に分析し、授業効果の検証を行った。

(2)	実践報告	高校	動機	小林潤子(神奈川県立横浜南陵高等学校)	Can-Doリストとストラテジーリストを使った指導の効果に関する一考察	文部科学省はCan-Doリストという形で学習到達目標を設定することで指導と評価を一体化し、4技能のバランスのとれた学習指導、自主的な学習者の育成、生徒中心の活動を取り入れた言語活動を行うことで学習意欲の向上を目指そうとしている。Can-Doリストを使った報告や研究が増えているが、Can-Doリストを使った指導が、「動機づけにつながっていない」との研究もある。本研究では、日頃の学習活動の中でCan-Doリストを意識させることと、英語学習ストラテジーを意識させることが、生徒の学習意欲と英語力にどのような効果をもたらすかを調査した。中堅の公立高校3年生2クラスを被験者として、一方のクラス群では、4技能のCan-Doリストを用い、他方のクラス群では、英語学習ストラテジーのリストを用い、生徒に学習時の自分の意識や行動を自己評価させた。両群に動機づけのアンケートとTOEIC Bridge縮小版を実施し、動機づけと英語力の比較・分析を行った。
-----	------	----	----	---------------------	-------------------------------------	--

第2日目(8月27日) 午前 大講義室 11:15~11:45

関東甲信越英語教育学会 総会

第2日目(8月27日) 午前 304講義室 11:20~12:30

学生昼食会